

参 考 資 料

気象経過及び農作物災害の概要

■気象の概要

1 1～4月：気温は、2月上旬から高くなり、3月、4月は平年よりかなり高めに推移した。タカトウヒガンザクラの開花日は3月25日で平年より8日早くなった。

2 5～8月：5月から6月の天気は数日の周期で変化し、前線や低気圧の影響で大雨となった所もあった。

関東甲信地域の梅雨入りは6月28日(平年比+1日)、梅雨明けは7月22日(平年比+3日)であった。

7月から8月の気温は高く推移した。7月上旬から中旬にかけて、曇りや雨の日が多く、7月下旬以降は晴れた日が多かった。

8月は大気の状態が不安定となって雨や雷雨となり、場所によって非常に激しく降った。

3 9～12月：9月の月平均気温は、多くの地点で統計開始以来最も高くなった。

10月中旬以降は、晴れた日が多く、月間日照時間が多くの地点でかなり多くなった。

11月は、上旬と下旬の平均気温はともにかなり高かった。

■主な農作物災害の概要

1 春の低温・凍霜害被害

4月9日から10日にかけて急激に気温が低下したことにより、果樹類で胚珠褐変の被害が見られた。

2 夏の降雹・突風被害

7月4日、27日には管内一部地域で、降雹による農作物への被害があった。

被害品目は多岐にわたり、中には減収や収穫不能となるほ場も見られた。

また、8月21日にも管内一部地域で、降雹及び突風による農作物、施設への被害があった。

3 冬の雪害

本年は、令和6年2月5日から6日にかけてまとまった積雪により、管内で12棟のハウスが

4 品目別被害状況

(1) 果樹

りんごでは「シナノリップ」などの早期に開花期を迎える品種で凍霜害を受け、着花量の低下や果実品質の低下が見られた。

なしでも、開花期の低温により「南水」を中心に結実不良が発生したが、その後の適切な管理により出荷量はりんご、なしともに前年より上回った。

(2) 作物

7月27日の降雹により、伊那市東部地域を中心に水稻で穂の折損被害が発生した。また、8月21日の降雹及び突風により、伊那市を中心にそばで折損の被害が発生した。

(3) 野菜

7月27日の降雹により、伊那市東部地域を中心にねぎ、きゅうり、スイートコーンで葉の裂傷、穂の折損被害が発生した。

また、8月21日の降雹及び突風により、伊那市地域を中心にねぎ、ズッキーニで葉の裂傷、果実裂傷の被害が発生した。



写真1 7月27日の降雹によるねぎの葉折れ

(4) 花き

7月27日に伊那市内で降雹があり、シンテッポウユリの花と葉に打撲痕が発生する被害があった。

(技術経営係 堀)

令和5年農作物の生育状況(主要家畜含む)

1 作物

(1) 水稻

育苗：は種は4月15日頃がピークとみられ、作業は順調に行われた。一部で高温によるヤケやもみ枯れ細菌病の発生もあったが概ね順当に経過した。また、育苗後半でムレ苗等の発生がやや多くなったが、大きな問題はなかった。

本田：田植えは5月連休中から本格的に始まり、盛期は5月21日頃とみられる。直播栽培は5月1日頃から10日頃にかけては種され、全般に順調に出芽揃いを迎えた。

田植後の活着は順調であったが、6月上旬にかけては日照不足等の影響により生育は停滞し、田植後30日(6月14日)の伊那米総合試験地の「コシヒカリ」の草丈は平年比95%とやや低く、茎数も平年比90%で少なかった。田植後40日(6月26日)の「コシヒカリ」の生育も、草丈は平年比95%、茎数は平年比82%で、平年を下回った。7月上旬以降、気温は平年よりも高くなり、田植後50日(7月4日)の「コシヒカリ」の草丈は平年比94%であったが、茎数は平年比96%で回復基調となった。田植後60日(7月14日)の「コシヒカリ」は、草丈は平年比99%、茎数は平年比89%であったが、「あきたこまち」や「美山錦」では、茎数は平年よりもやや上回った。各品種の幼穂形成期は、概ね平年並みからやや遅れた。7月下旬～8月上旬にかけては高温傾向で推移し、出穂期は早まり「コシヒカリ」の出穂期は7月29日(平年比-3日、前年比-4日)であった。

葉いもち感染好適条件が7月6日～15日にかけてまとまってみられたが、以降は少なくなり葉いもちが発生したほ場でも上位葉への伸展は少なかった。8月は高温少雨の傾向で、穂いもちの発生も概ね少なかった。斑点米カメムシ類については、特にホソハリカメムシの発生が目立ち、早生品種を中心に斑点米の発生が多く、上伊那米の品質低下要因としては最も大きかった。

成熟期は8月が高温傾向で推移したため、平年よりもかなり早く、「コシヒカリ」で9月10日(平年比-7日、前年比-8日)であった。

収穫は例年よりも早く、9月5日からカントリーが本格的に稼働し、9月は好天日が多く、作業は順調に経過した。刈り取りのピークは9月17日頃で、概ね10月5日頃に概ね終了した。

高温登熟障害による白未熟粒等は全般に少なかったが、収穫後半に刈り遅れが影響し、胴割粒が多くなった。

- ・農林水産省12月12日公表の作況()は前年
全国 101(100) 長野県 100(98) 南信 100(98)
長野県 10a 当たり収量 614 kg (608kg)
南信 623kg (621kg)

(2) 麦類(5年産)

大麦、小麦ともに適期には種が始まり、10月下旬から11月上旬にかけては種され(伊那米総合試験地は10月20日は種)、降雨も少なく作業は順調に進み、出芽と初期生育も順調であった。11月下旬は高温で推移し、秋期の気温が高かった前年ほどではないものの、生育はやや前進傾向となった。

12月以降は、1月下旬を除き、気温は平年並みからやや高く推移し、生育量は並～やや過剰気味で、大麦では肥切れにより葉が黄化するほ場もみられた。3月に入り、気温は平年よりも著しく高くなり、生育は大幅に前進した。

4月上中旬も高温傾向が続き、伊那米総合試験地の大麦「ファイバースノウ」の出穂期は4月19日(平年比-8日、前年比-6日)であった。4月下旬の気温はやや低めに経過し、小麦「東山53号(ハナチカラ)」の出穂期は4月30日(平年比-4日、前年比0日)で、やや抑制された。

4月10日に降霜があったが、大きな実害には至らなかった。また、5月6日の強風により、倒伏したほ場も見られたが、その後は回復したほ場が多かった。

赤かび病は小麦で5月上旬の開花期の降雨が影響して感染につながったほか、その後も登熟後半にかけて病勢が急激に進展して穀粒に多発し、収量に大きく影響した。うどんこ病は、発生はやや遅く、平年並みの発生とみられ、小麦での赤さび病の発生は「東山53号(ハナチカラ)」への転

換により平年よりも少なかった。

伊那米総合試験地の成熟期は大麦「ファイバースノウ」で6月1日(平年比-7日、前年比-6日)、小麦「東山53号(ハナチカラ)」で、6月21日(平年比+2日、前年比0日)となり、成熟期以降、収穫作業が行われた。管内での大麦「ファイバースノウ」の平均単収は346kg/10aで、前年対比85%であったが、収量は概ね平年並みとなった。品質は収穫後半の降雨により一部に「たい色粒」の発生が見られた。また、硝子率が許容値内に入らずCランクとなった。

小麦「東山53号(ハナチカラ)」は成熟した穀粒にも赤かび病が発生し、選別が困難な状況となった。結果的に当初想定していた収量よりも低く、平均単収は278kg/10a、前年(ハナマンテン)対比96%であった。

(3) 大豆

標準は種の盛期は6月18日頃で、6月上旬の降雨の影響もあり、は種はやや遅れ気味となったが、出芽は良好で、その後の生育は順調であった。麦後の晩播も6月下旬から7月上旬にかけては種された。

開花期は8月18日頃で、高温干ばつ傾向により、落莢や子実肥大への影響が懸念された。

高温干ばつに起因する子実肥大の不良により青立ちが多く、収穫作業は遅延気味となった。収量は80kg/10a程度と見込まれ、ほ場によっては極端に少なく、割れやしわなどの奇形、カメムシなどの虫害粒も多く、品質的にも不良が目立った。

連作ほ場では、帰化アサガオ類、ホソアオゲイトウなど難防除雑草が増加傾向にある。

(4) そば

ア 夏そば

5月上旬と6月上旬の多雨により、湿害による出芽、生育不良が見られた。登熟は概ね順調であったが、湿害による生育不良もあり、単収は40kg程度/10aであった。

イ 秋そば

干ばつ傾向により一部で出芽に影響が見られたが、全般的には順調に経過した。高温の影響で成熟期は早まり、収穫作業は10月5日頃から本格的に始まった。倒伏は少なく、登熟も良好で、単収は80kg程度/10aであった。

(福本)

2 果樹

(1) りんご

暖冬となり、高温で推移したため生育が早まった。4月上旬の降霜により、「シナノリップ」を中心に花への被害がみられ、その後、サビ果の発生により品質低下につながった。伊那市の「ふじ」定点の満開日は4月22日(平年差-7日)と早い開花であった。

今年は梅雨明け後から著しい高温となり、その後、極端な降雨や8月の高温により、「シナノリップ」、「つがる」、「シナノスイート」などで日焼け果や着色不良、収穫前落果が生じた。全般的に内部は先熟となり、収穫に苦慮した。

病害虫に関しては、6~7月の降雨で防除間隔が空いたことにより、褐斑病や炭そ病が一部で発生、全域でハダニ類が多発した。

本年のりんご全体の出荷量は、過去5年間で最も豊作であった前年を超す出荷量(前年比112%・JA全農長野販売実績12月末現在)となった。

(2) なし

中川村の「南水」開花始期は4月8日(平年比-7日)、開花期の降霜、低温により結実不良や変形果がみられた。

肥大は全般的に小玉傾向であり、開花期以降に低温少雨であったことが要因として考えられる。

また、干ばつ傾向であったことから、果実の硬度・酸度の低下が早く、糖度が高かった一方で、「豊水」や「南水」ではみつ症がみられ、品質低下となった。病害虫は、黒星病が一部の園地でみられた。

(3) ぶどう

発芽がばらついたが、凍霜害など災害による影響は少なかった。ただし、「シャインマスカット」や「クイーンルージュ®」に原因不明の花振るいや花穂の萎れ症状がみられた。粒品質は非常に良好で、生育前半の粒肥大も良好であったが、欧州系の「シャインマスカット」などでは、平年よりも収穫が1週間程度早くなり、一部園地でかすり症状等の褐変障害も発生した。

宮田村の醸造用ぶどう「ヤマソービニオン」は、本年は強い降霜がなかったため前年を超す収量となったが、15.6tで目標の18tには及ばず、糖度も18.7%と目標の21%には届かなかった。病害虫は、雨に起因するべと病・晩腐病、黒とう病が発生した。

(堀)

3 野菜

(1) アスパラガス

1月～2月は平年並みの気温で推移したが、3月は高温傾向となったため春芽の萌芽は早まり、3月下旬より出荷が本格化した。4月下旬から5月上旬にかけては低温で推移し、収穫量がやや減少した。6月上旬には大雨の影響で茎枯病が発生した。梅雨明け以降は高温干ばつ傾向となり、アザミウマ類等の被害が発生したほ場がみられた。

(2) 白ねぎ

春先の高温傾向で、凍霜害の被害もなく全体的に初期生育は順調であった。梅雨明け以降、高温干ばつ傾向で推移したため害虫の発生が増加し、アザミウマ類は7月後半から10月にかけて発生が多かった。さび病の発生は例年より少なかった。

生育は、全体に高温干ばつの影響で太りが悪いほ場が見受けられた。

(3) ブロッコリー

春作型については、定植は早いもので3月中旬から開始された。凍霜害の被害はなかったが、4月の低温でやや生育が遅延した。6月上旬の大雨によりべと病が発生したほ場が見受けられたが、概ね品質に影響する病害虫の発生は少なかった。

秋作型については、10月上旬の降雨以降から、黒すす病や黒腐病による花蕾腐敗症状が発生するほ場がみられた。

(4) その他の品目

果菜類については、高温干ばつの影響で、着果不良や生理障害が発生した。病害虫は、すいかで交配後の集中豪雨によりつる枯病が発生し、夏秋イチゴで夏場にアザミウマ類による被害が一部で発生した。(田中)

4 花き

(1) アルストロメリア

切花ピークとなる3～4月の開花は順調で、販売環境は悪くなく、出荷は計画的に進んだ。更新期のほ場では5月末までに改植作業を終了した。

梅雨明け後の7月下旬以降は異常な高温、晴天の日も多かったため、葉焼けや花焼けの発生が平年に比べ多く見られた。

10月に入っても高温が続き、葉焼け、花焼けに加え、葉芽の発生も多く、切り花に至らないものが多く見られ、品薄傾向となった。11～12月は気温が低下し、日照時間が確保され、生育開花は概

ね順調に経過した。

(2) カーネーション

越冬～春の生育は概ね順調に経過した。その後、3月上旬～5月上旬の高温の影響もあり、1番花の切り花は前進傾向となった。その後は、夜温が低く推移し、生育は概ね平年並みに戻った。しかし、梅雨明け後の異常な高温の影響もあり、2番花の生育は軟弱傾向となった。その後も、軟弱傾向は改善されず、例年に比べ切り花品質は劣るものが多い年となった。

(3) トルコギキョウ

季咲き作型は3月から定植が始まり、生育は前進傾向で、3月上旬～5月上旬の高温の影響もあり、生育は前倒しとなった。本年度は、どの作型でも生育期が高温で推移した影響もあり、8月の盆前出荷、10月前半出荷予定の作型まで、生育や開花が前進傾向となった。加えて、梅雨明け後の高温の影響に加え、水の利用が制限される地域では、抑制作型において短茎開花が目立った。

近年県内で発生が目立つ立枯病は、クロルピクリン剤による土壌消毒の効果や品種選定もあり、発生はほぼ抑えられた。一方で、青株根腐病の発生が目立つほ場が散見され、次年以降は対策を講じる必要がある。

(4) ゆり類

据置では、3月以降の寒暖差があったものの、3月下旬には、出芽が出そろった。梅雨時期には曇雨天や降雨の影響もあり、適切なタイミングでの防除が実施できなかった生産者も多く、早生種での葉枯病の発生が目立った。以降の作型では、適切な防除もあり病害の発生は抑えられた。7月27日には、伊那市東部を中心に、降雹があり、被害を受けた生産者もいた。

(5) コギク

越冬状況は前年より良く、春の生育は概ね順調に経過した。4月の台刈り時期以降、高温・晴天が続いたことで、生育遅延が懸念されたが、大きな影響もなく盆向け出荷が行われた。

所定の茎立数を確保しつつ病害虫防除を行ったものの、株落ちによる切花本数の低下、白さび病の発生、栽培者の減少もあり目標単収を下回る実績となった。

(6) シクラメン

本年度は最終鉢への鉢上げは、概ね例年どおりに行われた。7月頃より生育が前倒し傾向と

なり、ガーデンシクラメンは9月中旬から出荷が始まった。4～6号鉢は平年並みの出荷開始となった。一部のほ場で炭疽病、葉腐細菌病、軟腐病が発生し、作柄不良となった。

(小池)

5 畜産

(1) 家畜

畜産全般で昨年に引き続き、飼料や資材等の価格高騰等による経営悪化が深刻化しており、離農する経営体も増えている。経営改善にあたり、今後の需要動向や世界情勢が注視されている。

ア 酪農

管内では酪農家戸数は減少傾向であり、10月に乳価が10円上がったものの、生産コストの増加、子牛販売価格の低迷等、厳しい経営状況が続いている。一方で、後継者の就農等に合わせた各種事業の活用による規模拡大やスマート畜産技術の導入が進んでおり、一戸あたりの飼養頭数は増加しており、生乳生産量は前年比99.9%程度となった。また、規模拡大や飼料価格の高騰等により、一戸当たりの自給飼料生産面積は増加傾向となっている。暑熱対策として大型ファンや細霧機の導入が進んでいるが、本年は梅雨明け以降猛暑となり、一部で乳量や乳質の低下、繁殖等への影響が見られた。

イ 肉用牛

牛枝肉卸売価格がコロナ禍以降の外出需要の減少により年間を通して前年を下回ったことから、肉用牛肥育経営安定交付金が交付される状況となった。それに伴い、肥育農家が素牛導入を控えたことから和牛子牛価格も下落し、前年の9割～8割程度となった。特に12月の長野県中央家畜市場の販売価格は、肉用子牛保証基準価格を下回る状況となった。一方で、酪農家の副産物である子牛価格の安定化のため、管内では受精卵移植による和牛子牛生産数が増加している。

ウ 養豚・養鶏

豚肉及び鶏肉では、昨年同様家庭内需要が増えており、価格は昨年並み～やや高めと堅調に推移した。鶏卵では、業務用需要が回復傾向にあり家計消費も順調であったことから例年を上回る価格であった。家畜伝染病については、農場のバイオセキュリティレベル向上や衛生管理の徹底等により管内含め県内での発生はなかった。引き続き、緊急時の防疫演習の実施等を市町村等と協力

し行っていく。

(2) 飼料作物

ア 飼料用とうもろこし

5月上中旬からは種作業が始まり、天候も安定したことから発芽は順調であった。5月下旬以降は天候が不安定となり、初期生育はやや緩慢となった。梅雨入り後も集中豪雨等で生育がバラつき、7月後半からは干ばつ傾向で一部に枯れあがりが見られた。稈長は昨年の1～2割程度で、5月中旬は種のほ場では7月24日前後に出穂および絹糸抽出期となった。収穫は8月下旬から始まり、高温干ばつの影響から収量は全体的に1割～2割程度減収した。また、一部地域で雹害による倒伏や上部折損が発生した。病害虫はアワノメイガが見られたが収量等への影響はなかった。熟期は昨年並～やや前進傾向で、サイレージ品質は干ばつと生育不良の影響から、昨年に比べ水分、栄養価ともに低かった。

イ 牧草類

単年牧草のイタリアンライグラス等は、3月～4月上旬が高温で推移したことから生育は前進傾向となった。収穫は4月下旬から始まり作業は順調に進んだ。収量は出穂が早かった影響から草丈が伸びず、平年並～やや不良となった。5月下旬以降刈取りのものは刈遅れによる品質低下が見られた。

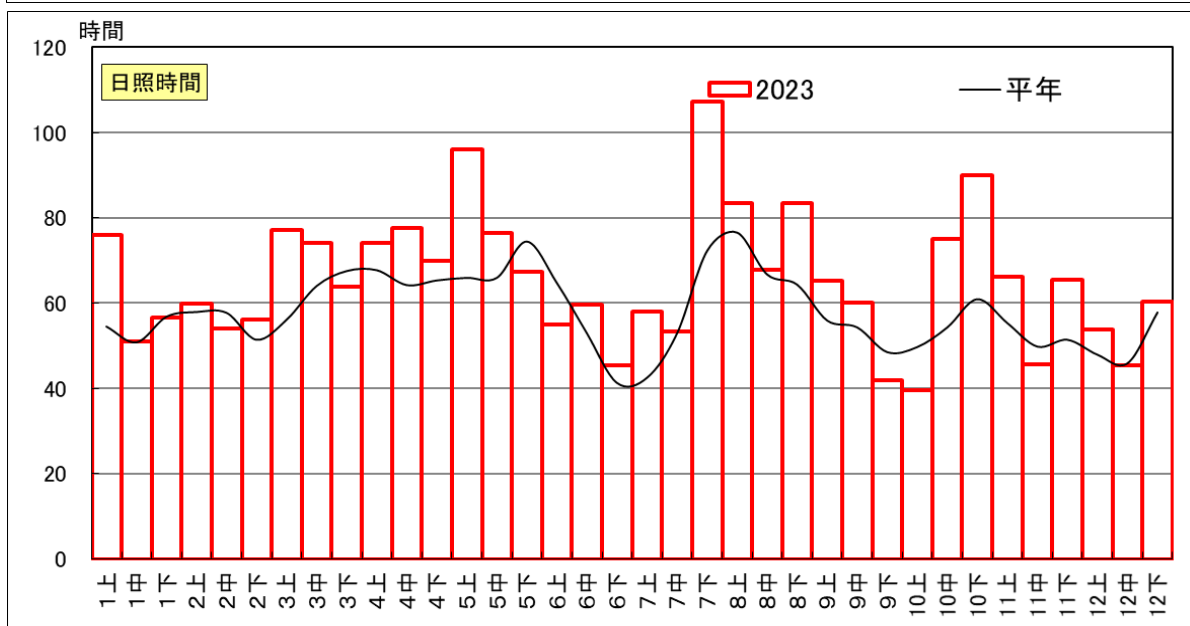
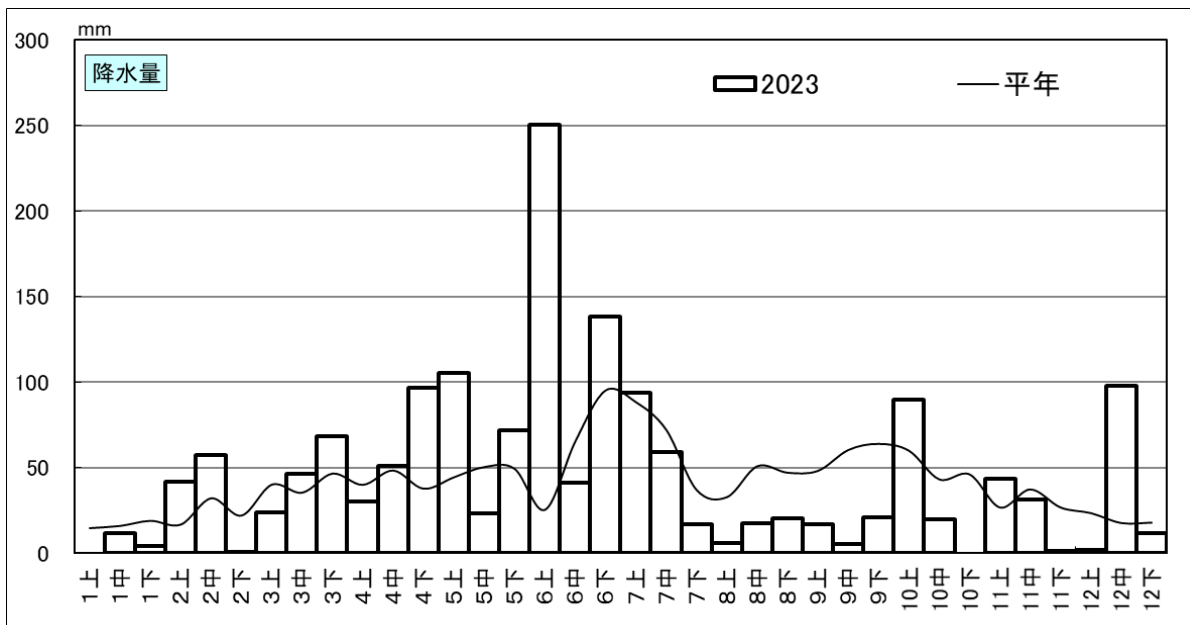
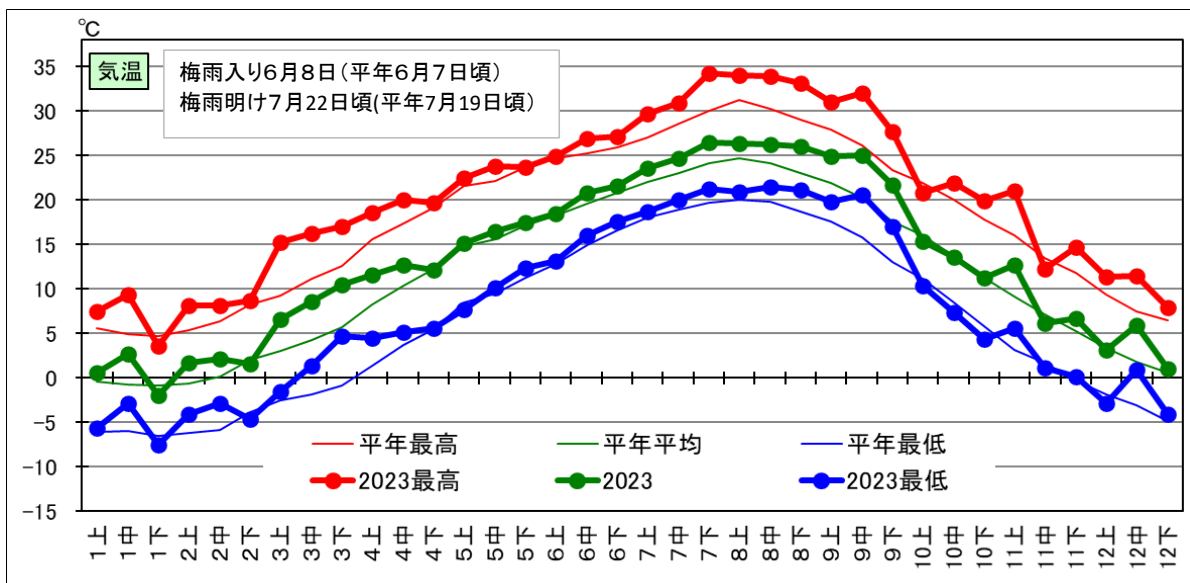
永年牧草も1番草で生育が前進傾向であった。収穫作業は5月中旬から始まり、5月中に収穫したものは収量・品質とも平年並みとなったが、6月上旬の降雨により刈取りが遅れたほ場で品質低下が見られた。2番草は、1番草の収穫時期により再生が大きく異なり、刈遅れのほ場では7月下旬以降の少雨の影響により再生が劣った。また、高温の影響により一部草種で夏枯れの被害が発生した。3番草以降も干ばつの影響により草丈が伸びず、雑草の発生等も目立った。収量は干ばつにより再生が劣った影響から半減したほ場も見られた。(唐澤)

6 菌茸

ブナシメジ栽培においては品種の更新が進み、それに伴う環境管理の変更が進められている。一部のブナシメジ培養施設でキノコバエの被害による害菌汚染がみられた。(田中)

2023年気象表 (アメダス伊那観測所 標高633m)

上伊那農業農村支援センター



※平年値: 1993~2020年の28年間

	降水量			平均気温			最高気温			最低気温			日照時間		
	2022	平年	平年差	2022平均	平年平均	平年差	2022最高	平年最高	平年差	2022最低	平年最低	平年差	2022	平年	平年差
1上	0.0	14.4	-14.4	-0.4	-0.4	0.0	5.8	5.6	0.2	-6.0	-6.1	0.1	70.3	54.5	15.8
1中	17.5	15.7	1.8	-1.2	-0.7	-0.5	3.5	4.9	-1.4	-6.1	-6.0	-0.1	46.6	50.8	-4.2
1下	4.5	18.7	-14.2	-0.8	-0.9	0.1	5.8	4.7	1.1	-6.5	-6.5	0.0	66.6	56.8	9.8
2上	18.5	16.5	2.0	-0.2	-0.6	0.4	5.1	5.4	-0.3	-4.8	-6.2	1.4	59.6	57.9	1.7
2中	29.0	31.9	-2.9	-0.7	0.2	-0.9	5.0	6.4	-1.4	-5.8	-5.8	0.0	40.9	57.7	-16.8
2下	0.5	21.8	-21.3	0.0	2.0	-2.0	7.1	8.3	-1.2	-5.9	-3.9	-2.0	62.2	51.4	10.8
3上	5.0	39.9	-34.9	3.2	3.0	0.2	11.5	9.3	2.2	-3.7	-2.5	-1.2	72.8	56.1	16.7
3中	56.5	35.2	21.3	8.5	4.3	4.2	16.5	11.1	5.4	1.4	-1.9	3.3	70.7	64.0	6.7
3下	43.5	46.4	-2.9	8.1	5.7	2.4	15.1	12.6	2.5	2.0	-0.8	2.8	56.7	67.5	-10.8
4上	16.5	39.8	-23.3	10.1	8.3	1.8	18.0	15.6	2.4	2.8	1.4	1.4	88.8	67.7	21.1
4中	39.5	48.2	-8.7	13.7	10.4	3.3	21.0	17.4	3.6	7.0	3.7	3.3	69.3	64.2	5.1
4下	134.0	37.5	96.5	15.5	12.3	3.2	22.2	19.2	3.0	9.5	5.5	4.0	52.1	65.3	-13.2
5上	16.5	44.2	-27.7	13.4	14.8	-1.4	21.0	21.6	-0.6	6.2	8.5	-2.3	86.3	65.9	20.4
5中	35.5	50.2	-14.7	15.8	15.6	0.2	21.5	22.2	-0.7	10.5	9.5	1.0	31.6	65.9	-34.3
5下	44.0	49.2	-5.2	18.6	17.2	1.4	25.6	23.7	1.9	12.7	11.3	1.4	85.2	74.4	10.8
6上	29.0	25.1	3.9	18.4	18.3	0.1	24.9	24.7	0.2	12.6	12.8	-0.2	74.8	64.7	10.1
6中	16.5	65.1	-48.6	19.5	19.6	-0.1	24.9	25.3	-0.4	15.0	14.9	0.1	40.9	52.9	-12.0
6下	34.0	95.1	-61.1	24.6	20.8	3.8	31.7	25.9	5.8	19.4	16.6	2.8	73.8	41.3	32.5
7上	54.5	88.3	-33.8	24.1	22.1	2.0	29.9	27.1	2.8	20.2	18.1	2.1	58.7	42.5	16.2
7中	80.0	72.0	8.0	23.3	23.1	0.2	28.5	28.6	-0.1	20.1	18.9	1.2	30.6	52.9	-22.3
7下	41.5	36.8	4.7	25.6	24.2	1.4	32.0	30.0	2.0	20.3	19.7	0.6	91.5	72.2	19.3
8上	15.5	32.6	-17.1	26.0	24.7	1.3	32.3	31.3	1.0	21.3	20.1	1.2	76.0	76.5	-0.5
8中	44.0	50.7	-6.7	24.0	24.2	-0.2	29.2	30.3	-1.1	20.3	19.8	0.5	32.2	66.7	-34.5
8下	21.5	46.9	-25.4	24.3	23.0	1.3	29.9	29.1	0.8	20.6	18.7	1.9	48.0	64.3	-16.3
9上	98.0	48.0	50.0	23.6	21.9	1.7	28.9	27.9	1.0	20.2	17.6	2.6	45.7	55.9	-10.2
9中	54.5	60.2	-5.7	23.5	20.3	3.2	30.1	26.2	3.9	18.7	15.8	2.9	67.9	54.3	13.6
9下	88.0	63.8	24.2	19.4	17.6	1.8	25.5	23.4	2.1	15.5	13.0	2.5	54.6	48.5	6.1
10上	68.5	59.8	8.7	15.8	16.0	-0.2	21.3	21.9	-0.6	11.1	11.2	-0.1	35.3	49.7	-14.4
10中	8.5	43.0	-34.5	14.9	13.7	1.2	21.3	20.1	1.2	9.9	8.5	1.4	60.4	54.3	6.1
10下	1.0	45.9	-44.9	9.9	11.3	-1.4	17.9	17.8	0.1	3.7	5.8	-2.1	71.3	60.9	10.4
11上	8.0	26.5	-18.5	9.1	9.1	0.0	17.6	16.1	1.5	3.1	3.2	-0.1	71.2	55.3	15.9
11中	10.0	37.1	-27.1	8.4	7.2	1.2	15.8	13.5	2.3	2.1	1.7	0.4	57.2	49.8	7.4
11下	90.0	26.5	63.5	9.7	5.3	4.4	15.7	11.8	3.9	4.5	-0.3	4.8	45.1	51.4	-6.3
12上	1.0	23.2	-22.2	4.4	3.4	1.0	11.2	9.4	1.8	-0.9	-1.8	0.9	58.2	47.9	10.3
12中	10.5	17.4	-6.9	1.5	1.8	-0.3	7.0	7.5	-0.5	-3.0	-3.1	0.1	30.8	45.9	-15.1
12下	20.0	17.6	2.4	0.2	0.6	-0.4	6.2	6.5	-0.3	-4.7	-4.8	0.1	61.3	57.8	3.5
年	1255.5	1421.9	-166.4	12.6	11.3	1.3	19.1	17.4	1.7	7.3	5.8	1.5	2145.2	2094.1	51.1

※平年値：1993～2020年の28年間

各種コンクール入賞者(令和5年度)

(敬称略)

コンクール名	表彰区分	入賞者名	市町村名
第 53 回日本農業賞 (集団組織の部)	優秀賞	J A 上伊那花き部会	広域
第 83 回中日農業賞	農林水産大臣賞	富永創治	中川村
信州フラワーショー (サマーコレクション)	農林水産省農産局長賞 長野県知事賞	酒井弘道 (農) らいふ	伊那市 伊那市
信州フラワーショー (ウィンターセレクション)	農林水産大臣賞 農林水産省農産局長賞 全国農業協同組合連合会長賞 長野県知事賞 長野県知事賞	矢野源彦 有賀美和 (有)末広農園 (農) らいふ 唐澤 勲	伊那市 中川村 伊那市 伊那市 箕輪町
第 35 回 JA 上伊那花き立毛品評会	長野県知事賞	松澤 広	中川村
令和 5 年度長野県アスパラガス生産力向上共進会	農林水産大臣賞	金井健二	南箕輪村
令和 5 年度果樹農業における担い手の育成及び活躍表彰 (活躍する担い手の部)	中央果実協会理事長賞	米本真之	伊那市

(注) 「長野県知事賞」、「長野県代表」以上の上位入賞者を掲載

令和5年度業務分担名簿

上伊那農業農村支援センター技術経営普及課

職名	氏名	担当項目・市町村	担当事務	
所長	赤羽 洋	総括		
副参事兼 技術経営普及課長	宮下 純	課総括	普及活動計画、普及職員研修、農業経営士、農業表彰	
技術経営係	課長補佐兼 技術経営係長	福本 匡志	係総括・作物	農作業安全、農業機械、スマート農業
	主任 普及指導員	唐澤 陽子	畜産・経営	制度資金、家族経営協定
	主任 普及指導員	田中 敬志	野菜・菌茸・病害虫・特用作物	植物防疫、農薬相談員
	主任 普及指導員	小池 賢人	花き	農業士、生育状況
	技師	堀 琴音	果樹	農業災害、伊那園振協
地域第一係	専門幹兼 地域第一係長	増田 達	係総括・伊那市・集落営農	伊那北部農業振興会議
	主査	原 亮太	担い手 (10月から)	就農コーディネーター、カイゼン
	主任	黒澤 窓	担い手 (9月まで)	就農コーディネーター、カイゼン
	技師	小林 瑞穂	南箕輪村・女性農業者	PALネット、農業女子、知的財産、農薬相談員
	技師	濱 昌憲	辰野町・箕輪町	実績集
	行政事務員	小野 美佐子	マーケティング・辰野町(副)	新需要創出、農産物活用、食育・地産地消、6次産業化、調査・展示ほ補助
地域第二係	課長補佐兼 地域第二係長	井ノ口 明義	係総括・駒ヶ根市	伊南農振協、農村生活マイスター
	普及指導員	増澤 高亨	中川村・環境・土壌肥料	土壌診断、鳥獣害対策、GAP、有機農業、農薬相談員
	技師	青沼 由希菜	飯島町	採種ほ
	技師	坂本 舜太	宮田村	情報